# りびんぐらいぶず　令和四年七月第二号

## 歓喜讃仰（かんぎさんごう）せしむれば

**◆ご讃題**

阿弥陀仏の御名（みな）をきき
歓喜讃仰せしむれば
功徳の寶（ほう）を具足して
一念大利無上なり

（Ref. 讃阿弥陀仏偈和讃』第三十首」注釈版 p561）

**◆御名を聞くとは何か**

この度のご法座のご縁に阿弥陀仏の御名のお心をお聞かせに与って参りましょう。衆生が阿弥陀仏の本願力に則り（法の真実）、南無阿弥陀仏とはっきり口に出して称えるとき、衆生はその耳を揺るがせ胸底に響く「聞名」という現象に恵まれます（機の真実）。

◆では、阿弥陀仏の御名をきくとはどういうことか。親鸞聖人は本願成就文を大切にされました。成就文では、第十一願、第十七願及び第十八願が一聯にお説き下さっています。ここでは第十七願及び第十八願を一聯に頂戴することに焦点をあててみます。

第十七願は、十方世界の無量の諸仏方が、阿弥陀様のお名号の功徳の不可思議なるを讃嘆なさる願文を受けて、成就文の諸仏如来は、みなともに無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃嘆したまふとあり、続いて「あらゆる衆生その名号と聞きて信心歓喜せんこと」とありますから、「名号を聞く」とは、諸仏如来が讃嘆なさるその名号を聞くことだと知ることができます。

諸仏如来のお一人がお釈迦如来です。「お名号の功徳の何と素晴らしいことよのう」とお釈迦如来が讃嘆なさるのです。

仏説無量寿経には、法蔵発願から本願成就の一部始終がお説き下さってありますので、お釈迦様が言葉を尽くして讃嘆なさった本願成就の物語をまずお聞かせに与ります。これを「広讃」を聞くと申します。

◆聞の対象はそれだけかというとそうではありません。第十七願には、**「不悉咨嗟　称我名者」**が聞こえて下さることになります。とありますので讃嘆の御文は、唯単に本願の物語をお説き下さるだけではなく諸仏如来が実際に南無阿弥陀仏と口称念仏の行業を行じて下さることを意味します。口称念仏を行じて下さると聞こえて下さるものは何か、諸仏如来の口業讃嘆のお声が聞こえて下さること（「略讃」を聞く）、「南無阿弥陀仏のお喚び声」が聞こえて下さることになるのであります。

その名号を聞くとは、本願成就の物語のみならず、諸仏如来の名号讃嘆の実践の声そのものをお聞かせに与ることを指しています。

第十七願は、諸仏如来が主語です。飽くまで諸仏如来が縷々讃嘆してお説き下さる名号の謂れの説き手と口業実践の主体は、諸仏如来です。

**◆六字には本願力回向のお心が秘められてある**

◆ところがです。南無阿弥陀仏の「南無とは帰命」の「帰命」には、阿弥陀如来から回向されている本願力回向の秘密の鍵が秘められていることが親鸞聖人によって明らかにされたのです。お六字そのものの本質として、阿弥陀如来から衆生に如来様の大行が回向されてあることが明らかになったのです（注釈版 P141）。「大行」とは何かといえば、則ち、無碍光如来の名を称することだったのです。

蓮如上人も端的に「南無と帰命する一念の処に発願回向の心あるべし」と仰せ下さいました（「信心獲得章」注釈版 P1192）。

「発願回向」とは、「如来既に発願して衆生の行を回施したまふの心なり」でしたから如来様のお手元でご本願をお建て遊ば

し成就された如来様の行を衆生の行として回施（回向）されたものであることがわかります。

もとより衆生にはお名号の功徳をお讃え申し上げるような力はありませんから、讃嘆するとは不遜でありおこがましい限りです。衆生自身がわが力で讃嘆しようとするならその通りといわねばなりません。

◆ところがです。

阿弥陀如来から本願力回向された法の真実を頂戴して実践する場合はどうでしょう。

大行は如来様から発願回向された行でしたから、衆生が如来様から賜った如来様の尊い行だと頷いて称えさせて戴く場合には、衆生自身にはその力はなくとも、お名号に秘められた働きによって、南無阿弥陀仏とお称えする行為がお名号の功徳を余すところなく讃嘆する行になるのでした。

衆生にとって大事なことはただ一つ、お念仏は如来様から賜った如来様の行を私という場の上で行じさせて戴くことだったのです。その身は愚かでも如来様から賜った行ならばこそ、私の上に如来様の尊い行が働き出して下さり、称えれば直ちに聞こえて下さるものこそは、如来様そのお方のお喚び声に他ならなかったのです。

帰命には、「帰せよの命、私の願いを聞いておくれ、われをたのめ、われにまかせよとの本願力がこめられてあったからです。

**◆「じむ」にはお育ての構造が秘められてある。**

「歓喜讃仰せしむれば」の「しむ」には三つの意義が込められてあります。

① 如来様が主体となって、基本的に「使役」＝そうさせる意と

② 如来様に対する尊敬の意と

③ 衆生が自らへりくだる謙譲の意の三つのお心です。

「使役」とは何かといえば、衆生がお念仏を如来様から賜ったお念仏であると頂戴してお念仏する身にまで如来様がお育て下さることを申します。

そのように頂戴してお念仏するとき、愚かな衆生の胸にも如来様のそのお心を仰いで「なんという尊いことよのう、まことよのう、まことまこと」という思いが満ちて下さる。これが尊敬のお心です。

最後の謙譲とは何か。如来様のお救いのお目当ては私のような愚かな者であったかとへり下らずにはおれないお心をさします。

「しむ」には、衆生が如来様のお育てに遇い、遂にお救いに与っていく道行きの全行程（プロセス）が秘められてあると頂戴できるのでした。

されば、称えれば聞こえて下さる本願招喚の勅命こそは、お育て戴いた仏恩を「まことよのう、まとまこと」と仰ぎ、愚かなこのような私をお救い下さることよのうと仰ぐ讃嘆のお名号になるのであり、ここに、**称即名**のお心が秘められてあるのでした。

◆最後に妙好人お軽さんのお歌を五木の子守歌でご一緒に歌わせていただきましょう

**・鮎は瀬に住む　小鳥は森に**
**かるは六字の中に住む**

**・なき後に　かるをたずぬる　ひとあらば**
**弥陀の浄土に　行たとこたへよ。**合掌。

**◆令和四年七月三日十九時半　正覚寺仏壮お聴聞の会**
**◆令和四年六月十六日（木）十九時半　正覚寺仏婦例会**

**著作編集兼発行元(本願寺派　正覚寺内)**
**〒520-0501** 大津市北小松四五二番地
**TEL077-596-0166・FAX077-596-0196** 住職堅田　玄宥